家族の快走録　第十五回

# 映画狂想曲

## 藤原美子

一二年前のある日のことである。一通のお手紙を受け取った。差出人は、木村大作さん。日本映画撮影監督協会の名入りの原稿用紙には丁寧な字が並び、とつとつとした言葉が綴られていた。自分はキャメラマンとして長く映画作りに関わってきたが、新田次郎の小説『劔岳　点の記』を映画にしたら素晴らしいだろうと考えていた時、藤原正彦さんの『国家の品格』の中で「悠久の自然と儚い人生」という言葉に出会った。これこそまさに自分が表現したかったものだと直感した。近く、『劔岳』の映画化の許可をお願いに伺いたい、というものだった。

木村大作さんは父の『八甲田山死の彷徨』や『聖職の碑』の映画でも撮影を担当した。その後、高倉健主演の「鉄道員(ぽっぽや)」や「ホタル」など多くの作品で撮影賞を獲得し、いまや日本を代表する映画キャメラマンである。

その木村さんが初めて監督兼キャメラマンとなってこの作品に挑戦したいという。夫は木村さんの作品をいくつか観ており、雄大な大自然を見事に撮りきることができるのは木村さんをおいてほかはない。父が生きていたらどんなにか喜ぶだろう、とすぐに快諾した

ランチボックスを手に学校へ出かける兄たちを
サブがハイハイで玄関口まで来て見送る。
イギリス、ケンブリッジにて。

「ミセス」 2008年6月号（No.641）
掲載ページ：P204～205
文化出版局発行

のである。

『劔岳　点の記』は実話である。明治四十年当時、立山連峰の一つである劔岳はその険しさから「針の山」と言われ、宗教上の理由もあり登ることが禁じられていた。日本地図の最後の空白地点を埋めるため陸軍測量部の柴崎芳太郎に対し、その山に登り標高を定めよ、との命令が下されたのである。この難行に命がけで挑んだ一測量部員の物語である。

これを映画にするといっても、舞台は毎年、滑落による死者が数人出ることで知られる劔岳である。この厳しい山岳地帯に俳優と大勢のスタッフが何ヶ月間もこもって撮影しようというのだから、命がけの仕事になるのは目に見えている。しかし木村監督は「本物の映画を作りたいんだ。この心意気に賛同した者が集結してこれを完成させるんだ」と勇ましい。

木村監督と何度かお会いしたとき、私は「我が家には大学に通う三人の愚息がいるのですが、映画のどこか隅っこにエキストラとして出していただくことは無理でしょうか」と、半ば冗談で言ったのである。すると監督は「陸軍の話だから、三人とも坊主頭になるならいいですよ」と言われた。私は坊主頭と聞いたとき、ああ、これは駄目だ。まず坊主頭は承諾しないだろう、とすぐに思った。長男はヘアーカットモデルになることが多く、当今流行のヘアースタイルをしている。次男はなぜそれほどの時間がかかるのか不思議なほど、毎日さまざまな整髪料を頭に振りかけたりして手入れしている。癖毛の三男はライオンのたてがみのようにウェーブのかかった長髪が広がり、それが彼のトレードマークとなっている。三人とも小さいころから一度も髪を短く刈ったことはない。ただでさえ年ごろになった息子たちが「うん」と言うはずはなかった。

息子たちの反応は三人三様だった。「人気沸騰したら、困るなあ」といらぬ心配をする者、「目立つことは嫌いだから出ないよ」と固辞する者、「小さいころに転んで作った三日月ハゲがわかるからいやだよ」と言う者。しかし三人で話し合い、三人とも承諾したのである。友人たちに話すと、皆が皆「え、本当に坊主になるのを承諾したの。信じられないわ」と驚くのだった。

「おじいちゃんのために三人がそこまで決心したんですね。すごいことだ」と言って、涙で声を詰まらせた人もいた。

父が亡くなったとき、長男は私のお腹の中にいた。しかし妊娠をまだ確認していなかった私は、孫の誕生を心待ちにしていた父に報告できなかったのである。そんな無念からその七ヶ月後に生まれた長男を父の本名、藤原寛人（ひろと）の一字をもらって寛太郎（かんたろう）と名付けた。その寛太郎も今や二十七歳になった。三人の息子たちは夫を亡くして寂しかった母と常に一緒にいたこともあり、普段から父の話をよく聞かされて育ってきた。

「おじいちゃんはね、お風呂に入ると気持ちよさそうに、よく〝白い花が咲いーてたー〟などと大きな声で歌っていたものですよ」「増刷の知らせが出版社から入ると、〝どうだ、新田次郎様のお通りだ〟と威張って家の狭い廊下を練り歩いたりしていましたよ」「おじいちゃんがいたら美子さん、子育ての間、大変でしたよ。二階の書斎で書いている新田には隣にいる美子さんの家の中の様子が手に取るように分かってしまいますからね。〝可愛い寛ちゃんが泣いていますよ。美子さん、何をぐずぐずしているんですか〟とすぐに文句を言いに飛び出してきますよ」などといった調子である。夫も「オヤジがいたら、寛太郎たちはいろいろな物語を聞きながら育つことができたのに残念だなあ」などとよく言っていた。

母や夫や私が常日ごろ、父について語ってきたので、三人の息子たちはおじいちゃんに会わずとも、しっかりとその存在を胸に刻んでいるように思う。だから息子たちが周囲の予想と違って坊主刈りを承諾したとき、私の中のどこかでは、ああ、やはり、と腑に落ちるものがあったのである。

監督に息子たちのことを報告すると、「綺麗に撮ってあげるから美子さんも出てくださいよ」という言葉が返ってきた。「なんということを。素人がいきなり銀幕なんて、無理難題とんでもない」と私は叫んだ。監督は大真面目のようである。数秒間しか出ないとはいえ、役所広司の妻の役という。とりあえず保留として友人たちに聞いてみたら、大喜びであった。「ぜひ出て、出て。私たち、撮影を見に行くわ。わあー、楽しみ。私、胸の大きさだけは自信があるから、そこならいつでも貸すわよ」と乗り乗りなのである。夫までもが周囲の人々に「うちの女房といったら、役所さんと濡れ場を演ずるとか言って大張り切りなんだ。僕も顔には自信があるけど、さすがに役所広司には少し負けるからなあ」などと勝手なことを言っている。

台本が届いた。主人公の柴崎芳太郎に浅野忠信、芳太郎の劔岳への案内人に香川照之、柴崎の新妻に宮崎あおいとそうそうたる面々である。撮影は明治村で行われるという。映画騒ぎから独り取り残された夫は「なぜか僕だけには監督からオファーがない。当日はお留守番をしています」と言って、臍を曲げている様子である。

ふじわら・よしこ
アメリカ・プリンストン生れ。お茶の水女子大学で発達心理学を専攻、修士課程卒業。在学中に藤原正彦氏と知り合い、卒業後に結婚。近著に『我が家の流儀―藤原家の闘う子育て』（集英社文庫）がある。

映画『劔岳　点の記』は二〇〇九年初夏全国ロードショー予定。原作・新田次郎『劔岳　点の記』（文春文庫）。監督、撮影・木村大作。出演・浅野忠信、香川照之、松田龍平、宮崎あおい、仲村トオル他。http://www.tsurugidake.jp/

「白い花の咲く頃」寺尾智沙作詞 JASRAC 出0804587-801